

二〇二四年度 茨城キリスト教大学一般選抜入学試験 一期

国語

(解答は解答用紙に記入すること)

I 次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、段落のはじめにある①～⑦は、設問の都合上つけたものである。

今、なぜ消費社会について考えなければならぬのだろうか。

その答えは、まずは自明にみえる。私たちは日々、消費を積み重ねながら暮らしている。本を買い、レストランに行き、マンションを買うといった直接的な消費だけではない。水道の蛇口をひねり、灯りをつけるといった本当は料金が発生していることがあまり意識されない消費もある。さらにはテレビをみて、ネットを利用するといった「広告」や「課金」などのかたちで他の誰かがおこなう支払いに便乗した間接的な「消費」も含めれば、私たちが購買活動にかかわらない日はないといっても過言ではない。

こうして当たり前のようにくりかえされている消費、またそれが積み重ねられることでつくられた消費社会に対して、ただし近年では批判が手厳しい。

ひとつに消費社会が非難されるのは、それが所得の「格差」と深くかわり成立していると考えられているからである。ある商品を買える者もいれば、買えない者もいる。それを決めるのはたしかに保有する金銭の量なのだが、消費社会はそうした貨幣所持にかかわる「格差」を前提に維持され、またその拡大を助長していると疑われている。

そしてだからこそ消費、また消費社会は批判される。格差をできるだけ減らし、消費にかかわる「不公平」が生じないようにするために、福祉国家を拡大し育児や教育などの基礎的なサービス(ベーシックアセットや、^{注1}ベーシックサービス)を充実させることや、究極的には「平等」な配分を実現するための^{注3}コミュニティが唱えられる。消費社会は所得の「格差」を前提として成り立つ社会とみなされ、そのためにそうした社会、あるいはそれを支える資本主義を変革することが目指されているのである。

①とはいえ社会体制そのものを変えることは、相当に困難にちがいない。だからこそ代わりに、個人のできる範囲で消費のやり方を変えることを説く者も多い。この場合、他人の目を意識した「不必要」な(とみられる)消費を減らし、自分に似合った、本当に良いとされるモノ、さらには具体的な形を取らない経験にお金を費やすことが大切であると自己啓発的に説かれていくのである。

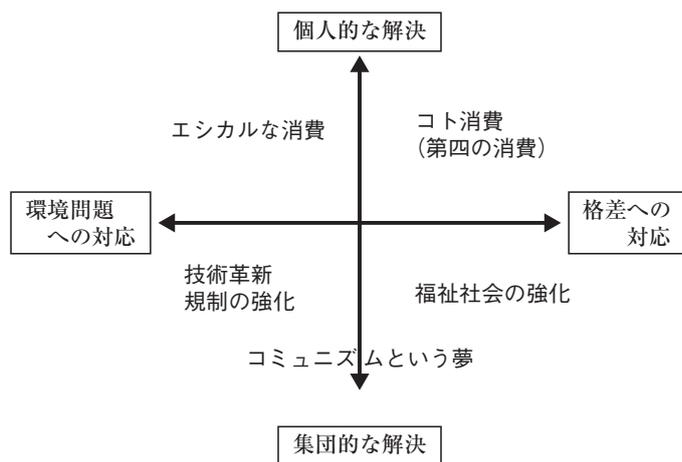


図1 消費社会の典型的「乗り越え」方

注4 a 三浦展はモノの真の価値や人との関係を重視した消費を「第四の消費」として持ち上げている。ブランド品ではない、一見質素だがつくり手のみえる食器や服を買い、旅行や音楽鑑賞などの体験を楽しむこと。通俗的にはたんなるモノから、体験や込められた思いを重視したコトへの価値観の転換と主張されるこうした消費は、金銭的または時間的コストがむしろ大きいという意味で、社会における「格差」そのものを減らすことはたしかにできない。だがだとしても「格差」に基づくみせびらかしの行為から購買活動が切り離されているようにみせかけることはできる。つまりそれによって消費を罪深い資本主義的な活動から b ことが試みられているのである。

他方、「格差」に基づくことだけではなく、消費や消費社会が環境を破壊していることも近年では強く非難されている。大量生産された商品を次々と消費する営みが環境にとって負荷が多いことは、たしかに誰にも否定しようがない。本書でも後に詳しくみるように、とくにかつて後進国とされた国が續々と大量生産・大量消費に加わるなかで、二酸化炭素排出増加に伴う温暖化の危険はますます切迫していることは否定できないのである。

c 消費社会を超える道が模索されている。ひとつ目はこの場合も個人的に対処する道で、環境負荷の高い商品避け、環境に優しい(とされる)商品を買うことが勧められる。「エシカルな消費」や「エコ消費」と呼ばれるこうした消費はハイブリッド車の購入やエコバックの使用などのかたちで、たしかに一定の市民権を今では獲得している。

他方、よりラディカルに社会の構造そのものをつくりかえる道もある。膨大な消費がくりかえされることで成り立つ現在の経済構造と、地球環境保護ははたして両立できるのだろうか。それを可能とみる者もいる。国の積極的な働きかけによって、技術革新を促し、さらに生産そして消費にたいする規制を強化することで、経済発展と地球環境の維持を両立できると d されているのである。

②それとは別に、より根本的に社会構造を根底からつくりなおさなければならぬとみる者もいる。この場合、消費社会、ひいてはそれを生み出した資本主義そのものの乗り越えが主張される。斎藤幸平の『新世の「資本論」』がその典型である。地球環境を保護するために、資本主義を変えなければならぬとされ、そのための手段として、先に格差の撤廃の際に夢みられていたのと同様に、 Kommunismusに期待が寄せられているのである。

③こうして図1にまとめられるようなかたちで現在、消費社会の乗り越えがさかんに唱えられている。本文でも確認するが、バブルの膨張がみられた一九九〇年代初めまでは、消費社会はあらたな社会の到来を告げる e な現象として語られることが多かった。だが二〇〇〇年代には「格差社会論」が流行し、さらにその後、地球環境危機が切迫することで、消費社会は乗り越えるべき諸悪の根源として非難

されるようになったのである。

④こうした事実把握そのものには、たしかに傾聴すべきところがある。実際、後に詳しく確認するように、格差の拡大と地球環境への損害が、現代社会の大きな問題であることは否定しがたい。現在あきらかになつているところによれば、いつそう多くの消費を促す資本主義が、貧富の差を拡大し、地球環境に多大なダメージを与えていることは、事実として認めるしかないのである。

⑤しかしだからといって、消費社会を諸悪の根源とすぐに短絡してはならない。その理由は大きく分けて二つある。

ひとつ目の理由は人びとが事実上、消費社会をなお日々選択し、受け入れ続けていることである。消費社会に対する批判が高まってからすでにそれなりの月日が過ぎていく。だが多くの人びとが消費することに飽き、興味を失っているようにには到底みえない。本書で確認するように、消費に費やされる金額はたしかに不況のなかで減つたともいえるが、その一方でデフレが進むことでそれに対応した購買活動も活発化したのである。

⑥もちろん一方ではエシカル消費の流行の波に乗り、エコであることをうたう洗剤や食品も増加している。ただしこうした変化が、消費社会を全体として変えたかどうかについては疑問が残る。たとえば本書で後に「リバウンド効果」として確認するように、エコな商品の購買は、さらなる消費のためのアリバイとなることがある。ハイブリッド車や電気自動車をあらたに製造すると、ガソリン車に乗り続けるよりもエネルギーがかかるだけではなく、それを買って安心してより多く乗り始めることで二酸化炭素の排出量を大きくする場合があることさえ確かめられているのである。

効果が不確かであるにもかかわらず、次々と異なる対象がもてはやされるといふ意味では、むしろこうした乗り越えの試みそのものが消費社会の流行であつた可能性が高い。環境に優しい商品だけではなく、「ロハス」や「シェア」、「ていねいな暮らし」や「ミニマリスト」的暮らしなどあらたなブームが起り、新規な消費の対象が紹介されてきた。しかし社会総体を変える気配もないままに、それらはあらたに現れるブームに取って代わられていく。その意味でそうしたブームは他の人に自分の道徳的、感性的「正しさ」をみせびらかすモードとして、消費社会を延命することに仕えてきたのではないかという疑いが合理的に残るのである。

こうしてある種の論者の非難にかかわらず消費社会が人びとに受け入れられてきたという事実上の問題だけではなく、消費社会を超えるという提案が望ましい社会を約束しているのかという f の問題もある。消費社会に対する批判は、人びとが同じような道徳的関心を持ち、平等に暮らしている未来を描いてみせる。しかしそうした社会が消費社会以上に本当に望ましいものであるのかどうかについては、慎重に吟味しておかなければならないのである。

⑦実際、本書は、消費社会がその根本において実現している多様性や自由をあくまで大切なものと考え、金を持つかぎりにおいて、私たちはこの社会において自分が望むものを何であれ、好きに買うことが認められている。消費が約束するこうした具体的な自由を過小評価してはならない。それはひとつにそれが、この社会では多様性の根拠になつていからである。酒を飲んだり賭けごとをするなど、たとえ愚かなことと他人から判断されよ

うと、自分の望みをこの社会で私たちは押し通すことができ、それをもとに私たちは「私」自身であることが具体的に許されている。

g 消費社会を乗り越えようと吹聴する企ては、こうした自由や多様性の大切さについて十分な配慮を払ってこなかった。平等や環境保護を実現するためには、多かれ少なかれ国家による規制や強制が避けられないが、それが消費社会で空気のように享受されている自由や多様性を損なう危険性についてはあまり真剣に考慮されてこなかったのである。

もちろん後にみるように、経済的な公平性や環境的な持続可能性を無視してよいと本書は説くのではない。逆にそれはきわめて大きな問題として論じられるが、だからこそ大切になるのは、そうした問題と消費社会で経験される自由と多様性をいかに折り合いをつけていくのかという課題である。私たちが気に入ったところに暮らし、好きな料理を食べ、趣味の娯楽を楽しむことは、一定の論者からみれば、たいした意味のない身勝手なふるまいに映るのかもしれない。しかしそうしたささやかな楽しみこそ、日常を生きていく上での誇りや尊厳を支える重要な核になっている。そもそも私たちはそうした自由を前提として消費社会の是非について論じることさえできているのであり、本書からみれば、それを無視して、現在の、または未来の社会について考えることのほうがむしろ危険なのである。

（貞包英之『消費社会を問いなおす』より なお本文に適宜省略・改変を加えた）

注1 ベーシックアセット……………多くの人が積極的に社会参加できるように、様々な資産を平等に配分すること。

注2 ベーシックサービス……………所得制限をつけず全ての人に医療や介護、教育などのサービスを平等に提供すること。

注3 コミュニズム……………共産主義のこと。

注4 三浦展……………一九五八年生まれ。日本のマーケティングリサーチャー、評論家、消費社会研究家。

注5 本書でも後に詳しくみるように……………この文章は『消費社会を問いなおす』の序章の一部であり、詳しくは後の章で述べられている。

本文中、このほかにも「本書で確認するように」「後にみるように」などの部分があるが、すべて詳しくは後の章で述べられている。

注6 エシカル……………道徳的、倫理的な。自分以外の他者を思いやること。

注7 斎藤幸平……………一九八七年生まれ。日本の哲学者、経済思想家。

注8 ロハス……………健康と環境、持続可能な社会生活を心がける生活スタイルのこと。

注9 ミニマリスト……………最小限の持ち物だけで暮らす人たちのこと。

問一 空欄 a) g に入れるのに最もふさわしい言葉を、それぞれア～エから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|--------|---|-------|
| a | ア | しかし | イ | 加えて | ウ | たとえば | エ | 一方 |
| b | ア | 回復する | イ | 免責する | ウ | 解放する | エ | 離脱する |
| c | ア | しかし | イ | つまり | ウ | ところが | エ | だからこそ |
| d | ア | 悲観視 | イ | 楽観視 | ウ | 客観視 | エ | 確実視 |
| e | ア | ポジティブ | イ | ネガティブ | ウ | アグレッシブ | エ | アクティブ |
| f | ア | 理論上 | イ | 説明上 | ウ | 権利上 | エ | 責任上 |
| g | ア | つまり | イ | ちなみに | ウ | けれども | エ | したがって |

問二 傍線部X「図1」において、筆者の言う「福祉社会の強化」とは、何をさしますか。四十字以内で答えなさい（句読点なども字数に含まれます）。

問三 傍線部Yの「エシカル消費」について、筆者はどのようにとらえていると考えられますか。最もふさわしいものをア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア みせびらかしのモード
- イ 環境に優しい活動
- ウ 技術革新を促す契機
- エ 社会における諸悪の根源

問四 この文章を内容の点から大きく二つに分けるとしたら、どこで分かりますか。二つ目の部分の冒頭の段落としてふさわしいものをア～キから選び、記号で答えなさい。

- ア 段落①
- イ 段落②
- ウ 段落③
- エ 段落④
- オ 段落⑤
- カ 段落⑥
- キ 段落⑦

問五 次の1～7の文について、筆者の主張としてふさわしいものには○を、そうでないものには×をつけなさい。

- 1 消費社会といってもその定義は多様であり、時代によって大きく変化してきている。
- 2 消費社会を変革するためには個々人の価値観の転換が重要である。
- 3 消費社会は環境破壊へと結びつきやすいと考えられるため、是正しなければならない。
- 4 消費社会は、デフレを抑える効果があるため一概に否定することはできない。
- 5 エコな商品の購買は、環境維持に効果があるかわからない。
- 6 消費社会について、それが与える自由や多様性も含めて、検討する必要がある。
- 7 消費社会を否定しなければ、平等や公平性を実現することはできない。

Ⅱ 次の各問に答えなさい。

問一 次の1～5の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 会社の不祥事が次々とロテイする。
- 2 私は長い歳月をタイカなく生活してきた。
- 3 衛星のキドウを修正する。
- 4 自然のキョウウイにさらされる日々が続く。
- 5 両チームの力はハクチュウしている。

問二 次の1～5の傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 人材不足のあおりを受けてビル建設の計画が頓挫する。
- 2 政治家は市井の人々の生活を知ることが必要だ。
- 3 親は子を慈しんで育てる。
- 4 失敗した友人を擁護する。
- 5 サケが川を遡る。

問三 次の1～5の四字熟語の□に当てはまる漢字を書きなさい。

- 1 一□打尽
- 2 紆□曲折
- 3 金□玉条

- 4 天衣□縫
- 5 意味深□

問四 次の1～5の語句の表す意味として最もふさわしいものを、それぞれア～エから選び、記号で答えなさい。

1 造詣

- ア 芸術的な発想力や創造力
- イ 神仏に対する信仰心
- ウ 学問や芸術への知識や理解
- エ 建築設計の基礎知識

2 遊説

- ア メリハリをつけること
- イ 各地を演説して回ること
- ウ リラックスの効用を説くこと
- エ ユーモアに富んだ説明をすること

3 穿^{うが}った見方

- ア 曲解した見方
- イ 懐疑的な見方
- ウ 将来まで見通した見方
- エ 本質を突いた見方

4 領袖

ア 集団の代表となる人物

イ 物事の始まり

ウ 節目となる出来事

エ 中心人物を支える存在

5 私淑

ア 自分自身を戒め慎ましくすること

イ ひそかに尊敬し模範として学ぶこと

ウ 個人的な思慕の情を訴えること

エ 私的な場面で公的な発言を自粛すること

問五 次の1～5の単語の類義語をそれぞれ後の【語群】から選び、記号で答えなさい。

1 躊躇ちゅうちよ

2 忸怩じくじ

3 固執

4 知己

5 鷹揚たうよう

【語群】

ア	親友
イ	逡巡 <small>しゆんじゆん</small>
ウ	端緒
エ	従容
オ	慙愧 <small>ざんき</small>
カ	拘泥
キ	空前
ク	巷間 <small>こうかん</small>

国語解答用紙

I

問一	a
	ウ
	b
	イ
	c
	エ
	d
	イ
	e
	ア
	f
	ウ
	g
	ウ

解答例

ス	育	究
を	児	極
充	や	的
実	教	に
さ	育 ²⁰	は
せ	な	平
る	ど	等
こ	の	な
と	基	配
。	礎	分
	的	を
	な	目
	サ	指
	ー	し
	ビ	、

(四十字)

30

総計

受験番号

II

問四	オ
問三	ア

問五	1
	×
	2
	×
	3
	×
	4
	×
	5
	○
	6
	○
	7
	×

問一	1
	露呈
	2
	大過
	3
	軌道
	4
	脅威
	5
	伯仲

問二	1
	とんざ
	2
	しせい
	3
	いつくしんで
	4
	ようづい
	5
	さかのぼる

問三	1
	網
	2
	余
	3
	科
	4
	無
	5
	長

問四	1
	ウ
	2
	イ
	3
	エ
	4
	ア
	5
	イ

問五	1
	イ
	2
	オ
	3
	カ
	4
	ア
	5
	エ

小計